

関中学校だより



関中学校HPにアクセス

第8号
令和8年7月15日発行
亀山市立関中学校
文責：校長

《目指す学校像》

一人一人の生徒が生き生きと学び活動する学校 地域、家庭とともに歩む学校 教職員が生きがいを持って働ける学校



「対話的で深い学び」が生まれる授業づくりに取り組んでいます。



「主体的・対話的で深い学び」という言葉をご存じですか？

これは平成29年に、国が定める教育課程の基準である『学習指導要領』で示された「これからの教育に求められる学びの視点」です。『学習指導要領』には「生徒が各教科等の特質に応じた見方・考え方（物事

を捉える視点や考え方）を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう過程を重視した学習の充実を図ること。」と定められています。

亀山市においても、『亀山市教育ビジョン』に「主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善を推進します。」、『亀山市学力向上推進計画』【第4版】に「学習内容を深く理解する力を育む「協働的探究学習」を核とした学びの質を高める授業改善に取り組み、「主体的・対話的で深い学び」を具現化してまいります。」と示されています。このことから、関中学校でも学校全体で「対話的で深い学びが生まれる協働的・探究的な授業」づくりに取り組んでいます。

それではなぜ、「対話的で深い学び」が大切なのでしょう。その背景には、社会の大きな変化があります。グローバル化の進展やデジタル技術の進歩、地球環境問題の深刻化への対応やコミュニティの維持など、私たちは今後ますます、様々な課題に向き合わなければなりません。そのような中、答えのない問いに対し粘り強く向き合い、対話と協働を通して納得解を見いだすことが大切になっています。



そのため、「あ～、そうか！」「なるほど。」と新しい気づきをつぶやく姿や「なんでかな？」「もっと考えたい！」と学ぶ楽しさを感じながら学び合う姿、「この向きから見てみたらいいんじゃない？」「◆◆と□□□がつながってるなあ。」と粘り強く学ぶ姿など、対話と協働を通して学びを深める姿が生まれるよう授業を展開していきます。このことによって、個々の知識を覚えるだけではなく物事のつながりや背景等を理解する力、異なる気づきを聴き合い新しい発見をするコミュニケーション力や創造的思考力など、これからの

社会を生きていく子どもたちに必要な資質・能力を育ててまいります。また、対話と協働を通してより深く学ぶことで、「知識の意味やつながり」を実感しながら知識を身につけることができます。

もちろん、その土台として「みんなが安心して学び合うことができる教室」であることが大切です。「ここ、どうするの?」と安心して言うことができ、「どこが困ってるの?」「一緒に考えよう。」と支え合いながら学び合える教室、「ここが分からないという子がいるんだけど、あなただったらどう考えるかな?」という教師の問い掛けに、仲間の「わからない」を受け止め合って共に乗り越えていける教室づくりを大切にしていきたいと思います。

教職員も学び合っています。

授業改善を進めるためには、教職員みずからが学び続けなければなりません。そのため、校内研修や校外視察等、教職員が学び合う機会を積極的に設けています。授業を開き合い、一人ひとりの子どもの気づきや困り感などの“学びの姿”を丁寧に見取った上で、それぞれの教科の面白さを味わうことができる、協働的・探究的な学習課題の設定や教師のファシリテーション等について、研究と工夫を重ねています。

その一環として、年度初めに、一人ひとりの子どもの学ぶ意欲を引き出す授業について、教職員で学び合いました。また、5月20日(水)放課後には、研究授業の授業案を検討しました。そして、6月に数学と美術の研究授業が行われ、子どもの学びの姿から学び合いました。日頃の悩みや疑問、気づきを聴き合うことで、一人だけで考えている気づかなかった学びが生まれました。

また5月・6月には、教育学の専門家である名古屋大学大学院教育発達研究科准教授の草薨佳奈子先生や、県内各地で教育アドバイザーとして活躍されている元公立中学校校長の金丸勝実先生にご来校いただき、授業改善や学校づくりについてご助言いただきました。

今後も引き続き、日々の授業改善をはじめとする教職員の専門性向上に努めてまいります。



《チャレンジしてみましょう!》

問題 右の図形に直線を1本だけ引いて、
面積を半分にしましょう。

★小学校の算数で学んだことをヒントにして、
問題にチャレンジしてみてください。

(※ヒント・正解は、後日、校長室前に掲示します。)

